鉄道貨車を人力で転向させる施設
ー武豊港駅跡地の直角二線式転車台ー

■貨車用転車台という希少派

「転車台」(英turntable)は車両を載せた橋桁状の構造物が円形坑の中を旋回するもので、蒸気機関車の向きを反転させるための施設として知られている。また転車台には、ある線路から別の線路へ車両を転線させるというもう一つの目的があり、蒸気機関車時代には転車台を中心として放射状に何本もの線路を敷き車庫とした。

一方、貨車用転車台の必要性は線路間の移動に限られる。例えば、敷地の制約から通常の曲線で結ぶことが困難な位置に置かれた倉庫前や工場内積卸場の引込線へ転車台を使って貨車を出し入れする場合である。それらは貨物駅の隅などにあるのが通例で、一般の人々の目に触れることは少なく、貨車用転車台の存在はあまり知られていなかった。

武豊港駅跡地の貨車用直角二線式転車台　写真：筆者撮影

■人知れず消えていった貨車用転車台

動力を持たない貨車を1両ずつ転車台に載せるのは主として作業者の人力に依っていた。転車台の回転もまた人力であった。貨車を直角に回転させた後、続く2両目、3両目の送り込みが容易なように、線路を十字型に配置した直角二線式を採用することが多く、貨車用転車台の代名詞となった。

戦後、貨物輸送の近代化が進むと、転車台による1両単位の貨車の出し入れは非効率とみなされ、貨物駅の改修、移転などを機に消えていった。都市部の貨物駅は土地の有効利用のため跡地が早々に転用され、転車台の痕跡はほとんど残っていない。今後衆目に触れるとしたら、大規模再開発で発掘された東京の汐留駅跡地のように埋蔵文化財として土台が調査される時であろう。

■奇跡的に残った武豊港の転車台

石油輸送用3軸タンク車の例　タサ500形式20トン積タンク車

撮影：豊永泰太郎（1960年）

武豊港駅の貨車用転車台は、駅跡地に進出した工場の隅の緑地に残されていた。特徴的な直角二線式の橋体部分が残存しており、武豊町による修復の後、2009(平成21)年に国の登録有形文化財となった。

1927(昭和2)年に設置されたこの転車台は桁長が7.3mで他の一般的な貨車用転車台(直径5m強)に比べて大きく、主として石油輸送用3軸タンク車を専用線に出し入れするため設置されたものとみられている。

なお、武豊港駅にはもう1基貨車用転車台が設置されていたが、こちらは一般的な5m級の大きさであった。(日本国有鉄道工作局機械課『転車台状態調査』S30より)

（夏目勝之）